

と和尚さんが感心するほど、吉十郎の字はじょうずでした。

吉十郎が、五歳になったある日、九月のなかばに、大雨の降り続いたことがありました。朝起きると、ゆうべからの雨は、まだやみません。

「だんなさま、た、たいへんです。」

家ぞくで朝ごはんを食べているところへ、村の人が、ずぶぬれになって、とびこんできました。

「大川のどてが、くずれそうです。村は、またやられます。」

父は、あわてて食事をやめ、村の人といっしょに、かけ出しました。間もなく、遠く、近く、早鐘はやがねの音がひびいて、川があふれたようです。

どてが破れ、大川の水がおし寄せてきました。村で最も大きな吉十郎の家も、たちまち水びたしになってしまいました。村じゅうの人々が、先を争って逃げ出しました。